

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第 7 号】
平成 30 年
11 月 26 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

働き方改革とやりがい

教育監兼学校教育課長兼

教育指導センター所長

勝亦 重夫



御殿場市教育委員会の構成

前教育長職務代理者の勝又英和氏が教育委員として再任され、教育委員の勝又綾子氏が教育長職務代理者に就任されました。

教育長職務代理者就任の挨拶

勝又 綾子

先生と子供たちの心の絆が感じられる授業風景、生き生き学ぶ子供たち、響き合う挨拶…。御殿場市の学校訪問の度に出会うそれらは、子供のみなならず、全ての市民も願う頼もしい「魅力ある園・学校」の姿です。

子供たちの教育の最前線で奮闘される教職員の皆様に、改めて心からの敬意を表すと共に、感謝申し上げます。

この度は、教育委員として更に身に余る重責をいただきました。非力ではありますが、教育委員としての役割を真摯に考えつつ、誠心誠意努めさせていただきます。

幸い、前職務代理者の英和委員を始め、見識高く熱意にあふれる委員ばかりです。勝

澄みわたる青空に、雄大な富士山が映える季節になりました。平成三十年も残すところあと一月となり、時の早さを実感しています。

一年の締めくくりは、子供にとって大切な時です。振り返りの時間を設け、自分自身の成長が実感できるようにお願いします。

さて、昨年から社会全体で「働き方改革」が大きな話題となっています。とりわけ、教職員の長時間勤務や多忙化

が注目を集めて、学校現場は「ブラック」とも揶揄されています。この状況を改善しようとして、教育委員会として「業務改善の方針」を示し、教育委員会と学校が手を携え、働き方改革を進めている最中ですが、各学校での改善状況はいかがでしょう。

業務改善の目的は、①教職員のワーク・ライフ・バランスの充実を図ることで、教職員が健康的に子供たちの前に立ち、ゆとりを持って指導を行えるようにする。②ゆとり

の時間を生み出すことにより、教材研究を深めて質の高い授業を行うようにする。③教職員のやりがいを基盤として学校の業務を見直すことで、本来学校で担うべき業務を明確化し、保護者や地域社会の学校運営への参画を進める。の

三つです。社会情勢の大きな変化とともに、学校に対する要望が増加し、多忙化に拍車をかけてきました。今の状態を続けていると、やがて学校はパンクをしてしまいます。今まで行ってきた業務をそのままに、

どんどんプラスをしてきたので当たり前の結果です。長時間労働の弊害として考えられることはいくつもありますが、大きいものとして二つあります。一つは授業の質

の低下です。今、求められている「主体的・対話的で深い学び」のある授業を行うためには、教師がじっくりと教材研究し、授業の準備をする必要があります。もう一つは教職員の能力開発の機会損失です。「教育は人なり」の言葉どおり、教職員の質が教育の質を決めます。疲れ切って自己研鑽をする時間がなければ、

資質の向上は望めません。

今の厳しい勤務状況の中でも、一生懸命に仕事をしているのは、教職員が子供の成長にやりがいを持っているからに他なりません。しかし、やりがいだけに頼っては限界があります。

学校本来の目的に立ち返り、どうしても必要なことを大切に、できればやった方がよいレベルのことは思い切って削減していくことが業務改善には必要です。そうすることです、まずまず教職員のやりがいが高まり、質の高い教育を子供たちに提供できると考えます。

又將雄教育長の力強い舵取りをいただき、委員同士で活発に意見を交わし、御殿場市の教育充実のため力を尽くしてまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

教育委員再任の挨拶

勝又 英和

学校教育現場では、ICT化による新たな教育環境や、ここ近年の異常気象による猛暑対策の必需性など、早急な対応が求められておりますが、文化都市御殿場としては、図書館・資料館・博物館等の施設の充実も求められます。市民・社会が丸となり、子供たちを育てる御殿場市。大人になった子供たちが、誇れるような御殿場市を目指し、これからも務めさせていただきます。

教育長	勝又 將雄
教育長職務代理者	勝又 綾子
教育委員	勝又 英和
教育委員	佐藤 朋裕
教育委員	芹澤 えつ子
教育委員	大西 孝明

風薫る

教育指導センターから

「よい授業」の第一歩を考える

指導員 湯山 伸彦

全ての先生方が、「よい授業」を目指して、日々研修や実践を積み重ねています。しかし、「よい授業とは？」と尋ねられて「こういう授業です。」と確信を持って答えることにはなかなか難しいのではないのでしょうか。それは、「よい授業」の条件がいくつもあるだけでなく、授業後の定着度や実生活への活用度などまで考えると、明確には答えられないのも無理はないと思います。若い先生の一途な思いや若いパワーは、児童生徒にも体感として伝わっていると思えますが、授業となると溢れる思いをそのままぶつけられないというわけではありません。児童生徒は、日々膨大な量を学習しなければなりませんし、心身ともに休むことなく成長をしています。教師は、学習内容を系統的に整理し、

児童生徒がしつかり消化して力としていけるような授業にしたいものです。

授業の視点は、たくさんありますが、「よい授業」の第一歩を考えてみたいと思います。

(一) 全員が意欲を持って取り組める課題を設定する。

この一時間で、児童生徒にどのような力をつけるのかを鮮明にし、直球を真中に投げ込みたいものです。児童生徒が「この球は打てる」とフルスイングしたくなるような絶対好球がいいでしょう。

【事例一】原里中学校の鈴木未央先生のおかずを一品つくる。一人準備・調理・試食・片付けまで一時間という挑戦的な授業でした。

開始から生徒の眼は輝き、活気あふれる雰囲気。調理室に立ちました。それぞれの生徒が、自分でメニューを考え、計画を立てて、準備を進めてきたものです。満を持して矢が放たれたかのように生徒が躍動していました。一時間では無理かと思いましたが、一

名を除いてやり切りました。

その一名にも、数名が助けに入り何とか終了しました。生徒たちは、フルスロットルで活動した授業でした。

(二) 学びの実感が味わたる展開を組み立てる。

児童生徒が、今、何に向かっているのか、何をすればよいのかが分かり、学習した実感が味わたる授業の展開を考えたいものです。何をすればいいのかわからないと困惑あるのみです。

【事例二】西中学校の山田兼世先生の一年生のバスケットボールの授業では、最初にバスケットボールでの動きをたくさん組み込んだ準備運動を音楽に合わせてたつぷりと行い、その後は十か所あるシュート板を使って、バスケットボールの醍醐味であるシュート練習をたくさんしました。

そして、本時のメインである二対二でシュートにつなげるための動きを考え、追究しました。生徒は、一つ一つの動きのつながりを理解し、できたこ

との実感と次への課題をもつことができました。

(三) 安心して表現できる雰囲気を作り出す。

自分の考えを述べたり、表現したり、ということがのびのびとできる雰囲気がないと、学び合う集団にはなれません。間違えたり、失敗したりしながら向上していくことを支え合う学習集団をつくることで、授業の質も高まります。

【事例三】御殿場中学校の松原雄先生の英語の授業では、どの学級でも生徒が間違えることやできないことを恥じたり、揶揄したりということがなく、今の自分ができる範囲で表現しようと頑張ります。

英語の歌も自然に歌い出し、問いに対して答えたり、作文にも意欲的に取り組みます。先生からは、「今日できなくても、明日も、明後日もやるよ。先生は、できるまでサポートするよ。」という姿勢を感じます。生徒は安心して学ぶことができます。

キーワードは相互の「信頼」ですね。

